

---



---

 論 説
 

---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 6  
P.16-25 (2018)

## 主体感の希求

— 中村文則「私の消滅」をめぐる心理学的観点からの一考察 —

### The Search for Sense of Agency : Analysis of Fuminori Nakamura's Novel “Disappearance of Self” from the Viewpoint of Psychology

山 岸 明 子\*  
YAMAGISHI Akiko

#### 要 旨

確かな主体感—自分が自分の行動の主体であるという感覚—をもてない者は、何が原因でそうなるのか、そのためにどのような行動が取られるのかを検討するための事例として、現代の虐げられた者の心理とその病理を巧みに描く中村文則の小説「私の消滅」を取り上げ、主体感の観点から心理学的検討を行なった。主人公の精神科医は、自分の行動とそれに対する外界からのフィードバックに齟齬があったり、首尾一貫感覚をもてない状況に置かれていたため、主体感が不確かになってしまったが、不明瞭な主体感が「悪」により鮮明に補われる経験をもったことから、自分の人生を損なった者に復讐するために、彼らを全的に支配することを目指して、ECT（脳への電撃）によって彼らの記憶に基づく「自己」を消滅させ、自分のつらかった記憶を埋め込む。更に自分の人生を決めるのは自分であると感じるために、今までの記憶を消滅させ、別の「自己」になることを選ぶ。その衝撃的な行動は、彼の育ちがもたらした主体感の歪みに基づいていて、確かな主体感を希求するための方法であったこと、彼にとって連続的なアイデンティティよりもその時々主体感の方が重要であることが指摘された。

索引用語：主体感、首尾一貫感覚、自己、記憶

Key words : sense of agency, sense of coherence, self, memory.

#### 1. はじめに

主体性をもつこと、自分を「自分の意志をもつ一個の独立した主体」と感じ、自分の意志で行動することは、我々にとって非常に重要なことであり、子どもをそのような存在にすることは教育における大きな目標の一つである。本稿では自分が自分の行動の主体であるという感覚を「主体感」とし、確かな主体感をもつ

ことが自我の基盤となり、健康的な生につながると考える。

世の中には、確かな主体感をもつ人と、十分なものをもちず内的に問題をかかえる人がいると思われる。やらされているのではない、自分の意志でやっていると思える時、我々は意欲や自己尊重感をもち、自分の行動に責任をもとうとする。しかし他者に命令・指図され、あるいは振りまわされて、自分の意志で行動していると思えない場合もあり、そういう機会が多い者は、自分の意志を引っ込めて他者に従い、自己主張し

---

\* (元)順天堂大学

\* (former) Juntendo University

(Nov. 10, 2017 原稿受付) (Jan. 19, 2018 原稿受領)

ないおとなしい子になる。まわりに言われるまま、期待されるまま振る舞う彼らは「よい子」と思われ、外的には問題が見えなくても、内的には問題を抱えることになる。

なぜある者は確かな主体感をもてないのか、どのような育ちがそれに影響するのか、主体感を感じられないことがどのような行動をもたらすのかを考える上で参考になる事例として、本稿では中村文則の小説「私の消滅」<sup>1)</sup>を取り上げる。事例といっても著者による創作であり、また特異な例であるが、現代の虐げられた者の心理やその病理を敏感にとらえ巧みに表現する作家によって、印象的にそれが描かれていると考えるからである。

著者の中村文則は1977年生まれ、2002年「銃」でデビューし、新潮新人賞を受ける。更に「土の中の子供」で芥川賞(2005)、「掏摸」で大江健三郎賞(2010)、「私の消滅」でドゥマゴ賞(2016)を受賞、アメリカでも賞を受け、近年注目されている作家である。彼が描く主人公は虐待を受ける等つらい人生を送ってきて、トラウマに翻弄されながら、それでも時に幸せな出会いがあり幸せな一時を過ごしたりするが、やっと手にしたそれを奪われてしまうという話が多い。悪意に満ちた残酷な世界に翻弄されてきた主人公は、自分が「悪」になって(「去年の冬、きみと別れ」<sup>2)</sup>では「悪」をなす化物になるために恋人と別れる)他者に復讐をし、あるいは世界への憎悪から「悪」に志向する主人公もいる(例えば「悪意の手記」<sup>3)</sup>)。虐待においては他者から全的に支配され主体感をもてないが、長じると彼らは「悪」に志向し、かつて彼らがやられた様に他者を全的に支配しようとする。

そのように、描かれるのは闇を抱えたつらい人生なのだが、彼らは自分を支えてくれる人や心惹かれる人に会い、それまでとは異なった幸福感を味わったりすることもある。つらい思いをして絶望している人が「君はこの世に生まれてきたのだから、美しいもの、素晴らしいものを見るべきだ」というように助言され

る場面があるし<sup>1)</sup>(「何もかも憂鬱な夜に」<sup>4)</sup>にも同様な場面がある)、著者も「あとがき」に「この世界は時に残酷ですが、共に生きましょう」<sup>1)</sup>と書いており、暗い中に希望が見える小説でもある。

「私の消滅」も上の路線にある小説だが、更に心理学や脳科学の知見を使い「私とは何か?」を問う問題提起の書である。「去年の冬、きみと別れ」<sup>2)</sup>でも、復讐を行う時「僕は僕であることを止めた」という場面があり、自分が変わるといふことの前駆が見られるが、「私の消滅」は「このページをめくれば、あなたはこれまでの人生の全てを失うかもしれない」という文章で始まり、「これまでの人生の全てを失い、別の自分になる」ためのECT(脳への電撃)のボタンを主人公が押すところで終わっている。「私とは何か」という古くからの哲学や心理学の問題に対して、脳内の記憶を入れ替えることにより別の私になるという新しい観点が提示される。

そのように「私の消滅」の主人公は衝撃的で不気味な行動をとるが、それはよく見られる主体感の希求のための行動であることを示そうと思う。主体感をもてずそれを求めて取られる歪んだ行動は、多くの問題行動にしばしば見られるが、それが徹底的に、しかも脳を操作するという新しい方法—SF的だが、現実にも起こりうると感じさせる方法—を使ってなされる。そしてその手法を自分に対してまで使い、自分のあり方を全的に自分でコントロールしようとする主人公が描かれる。

本稿では、まず中村文則の著書「私の消滅」の概要を述べてから、主体感と関連する心理学的な知見について述べる。その後主人公の育ちと主体感のもたれ方との関係、そして彼がとった行動を主体感の観点から考察する。

## 2. 「私の消滅」の概要

1から15の章とその間に9つの手記、手紙やメール、添付資料がはさまるといふ複雑な構成の小説で、

15の章の文中の「私」が誰で、誰が書いているのか読者にはなかなかわからない。しかしこの小説の主人公は精神科医小塚亮太のようであり、その生い立ちや現在に至るまでの出来事や状況が書かれているということはすぐにわかる。そして読み進めていく内に、手記とその他の資料は小塚が書いたものである一方、1章から15章の語り手は、はじめの内は別の人物だが徐々に小塚本人の様になっていき、彼の物語を埋め込もうとされた者の語りであることがわかってくる。その語り手が死亡した後に、第三者（著者）の視点から物語の全体像が語られ、主人公は「私」を「消滅」させるボタンを押す。

小塚亮太は母親の再婚後、暴力的な養父と一緒に住む祖母、妹から疎まれていたが、彼の行為が妹が崖から落ちることにつながり、妹はけがをしてしまうという事件がおこる。そのことで母親は父親に殴られ、二人は家を出る。母親はスナックに勤めて男ができ、男たちは家に来て性行為をするようになる。彼らは暴力的で、母親が暴力と性行為の対象になるのを亮太は日常的に目にする。ある時、亮太が酔った母親を押した時、壁にぶつかった母親が誘うような眼をした気がして、亮太は怒りを覚え、母親に怪我をさせてしまう。彼は児童自立支援施設へ送られ、その後引き取りを打診された母親がそれを拒否したため、養護施設で暮らすことになる。

精神科医の診察を受け、問題があるため、内面の修復が試みられる。その後精神科医の提案により、同僚の精神科医に養子として引き取られることになる。彼はその家庭で育ち、精神科医になる。（彼を診察した精神科医吉見は悪意から人を操ろうとする人間で、内面修復のために催眠によって記憶を曖昧にすると共に、面白半分で母親と性行為をしたと思わせ—そのために彼は性において問題をもってしまう—、その結果を見るために同僚に引き取ってもらったことが、後でわかる。）

ゆかりという若い女性が診察に来て、小塚は恋に落

ちる。彼女はつらい経験のために鬱になっているのだが（実はゆかりは吉見の患者で、吉見はトラウマになっている経験を忘れさせるためにECTと催眠をかけ、それと共に自分と性行為をしたと思わせる）、吉見は小塚に埋め込んだもの（自分は母親と性行為をしたという偽の記憶）の効果を見るために、ゆかりを小塚のところに送り込んだのである。小塚はゆかりに夢中になり、ゆかりを苦しみから救うために、ECTをかけることにする。その結果彼女は過去のつらい経験を忘れるが、それだけでなく全ての記憶を失い、小塚のことも全くわからなくなってしまう。

ゆかりはカフェに勤め、その店長の和久井と恋仲になる。しかし吉見は、以前ゆかりの醜態をビデオに取った間宮と木田を見つけ、ゆかりの居場所を教える。間宮と木田によって、ゆかりは忘れていた過去を思い出し、自殺してしまう。

愛するゆかりを失った小塚と和久井は、協力して間宮と木田に復讐をすることにする。彼らに強いECTをかけて記憶を消し、催眠によって小塚の記憶を埋め込むことにする（その過程を間宮が語ったのが1～15章である）。木田はECTが強すぎて廃人になり、間宮も徐々に小塚の様になっていき、小塚がかける催眠に従う形で、ゆかりの代わりになると言って首を吊る。小塚に偽りの記憶を植え付けた吉見は木田に殺させる。

復讐は成功する。「このままだと自分が死んで終わりだろう。自分の人生の結末。でもそうなるわけにはいかなかった。そうすれば自分はこの世界に敗北したことになる。だからECTの機械の前にいた」小塚は自からECTをかけて、平凡な育ちをした人物になることにする。「一度は別の人生を望んでみたかった。これまで経験することのなかったこの世界の何かの平穩を—。」「失敗したら、精神科医として患者を治す存在としてだけ生きる。」そう言ってECTのボタンを押すところで小説は終わる。

### 3. 主体感の定義、及び主体感と関連する心理学的知見

小説の分析に入る前に、本稿で使われる主体感の定義と、主体感と関連する心理学的知見について述べておく。次章からは、それらを踏まえて分析を行う。

山岸<sup>5)</sup>は「主体感 (sense of agency)」の概念を提示し、Eriksonの自我発達理論<sup>6)</sup>の青年期までを「自分がある」という感覚＝「主体感」の変化の問題としてとらえる試みを行っている。そこでは主体感とは「自分の行動が外界に何らかの変化をもたらしたと認知された時に経験される、変化の原因、主体 (agent) は自分であるという感覚」と定義されている。その理論的背景として、Whiteのコンピタンス<sup>7)</sup>や、Rotterの内的統制<sup>8)</sup>、deCharmの自己原因性や指し手<sup>9)</sup>、Banduraのself efficacy(自己効力感)<sup>10)</sup>などがあげられており、個人の内的な経験であると同時に、個人が行動し外界に変化をもたらすという外的出来事に支えられた客観的な経験でもある。

主体感を経験するためには、1) 自分の行動が何らかの成果をあげたと感じられること、そして2) その行動の源泉、主体は自分であると感じられること、が必要である。そして主体感を経験した時に我々は「自分がある」という感覚や自己尊重感をもつ。

心理学では長い間、生まれた時は自分と他者、あるいは自分と外界との区別はなく、「自分」を知覚するまでにはかなりの年月が必要とされてきた。それに対し、最近の乳児の知覚・認知発達の研究によると、乳児は外界とかかわる中で外界と同時に自己も知覚していることが示されている<sup>11)</sup>。つまり自分の運動がもたらす結果—運動に対して返ってくる外界からのフィードバックや、自分の内部からの刺激を感覚器官がとらえることによって、外界と自己を同時に知覚し、かなり早期から成熟した身体的な自己意識をもち、外界とは異なり外界とかかわるものとしての自分を感じるようになってきていると考えられている。自分の姿を自分だとわかるようになるのは、鏡映自己像の実験(鏡に映っ

た自分の像への反応からそれをみる実験)が明らかにしている様に18～24ヶ月頃であるが、外界にかわり外界に変化をもたらすものとしての自分の経験はより早期からなされていると考えられる<sup>11)</sup>。

Neisser<sup>12)</sup>は自己を5つに分類したが、その一つの「生態学的自己」—視覚、聴覚、内受容感覚などによる物理的環境の知覚に基づく自己—はそのような自己に該当していると考えられる。またGallagher<sup>13)</sup>は自己意識をMinimal selfとNarrative selfに分けて考えているが、Narrative selfは物語られる自己で「永続的に存在する」もので、Eriksonのアイデンティティに近い概念と考えられる。それに対し、Minimal selfは「一時的なその場限りの自己」であるとされる。Narrative selfは言語が必要であるが、Minimal selfは言語がなくても成立するため、より早期からもたれると考えられる。Minimal selfは自己主体感 (sense of self-agency) と自己所有感 (sense of self-ownership) から成っているとされる。自己主体感は「ある行為を自分でやっている」という感覚で、例えば「手を挙げる」という行為に対し「自分が手を挙げた」という感覚であるのに対し、自己所有感は「ある行為が自分の身体で行われている」という感覚で、「挙げたのは自分の手である」という感覚である。

「生態学的自己」もMinimal selfの自己主体感も、自分が行動の主体であるという感覚を含んでおり、上述の主体感の定義の2)に該当し、本稿でいう「主体感」に近いといえる。但し定義1)の「自分の行動が何らかの成果をあげたと感じられる」ということは含まれていない。本稿でいう「主体感」は、単に「自分がある」と感じるだけではなく、自分が確かに何かを成し遂げたという喜びや誇りの経験を伴うものである。

「何かを成し遂げた」という主体感は、外界に対するかわりにおいて外界が思う様に变化した時に経験されるが、対人的なことに関しては主体感は自分の働きかけによって他者が自分が思うように応じてくれた時に経験される。山岸はこの2つの主体感を、対物

的主体感と対人的主体感としている<sup>9)</sup>。

Eriksonによれば、乳児は養育者からの世話を受け、自分の欲求を受け止めて満たしてもらうことから、自分が訴えればその人は応じてくれるという信頼感（基本的信頼）をもつようになるとされるが、これが対人的主体感の元である。当初は「他者」という認識はなく、自他は必ずしも明確に分化しているわけではないが、自分とは異なる「よきもの」—自分に応じてくれる存在を感じているといえる。（自他の分化が明確になっていく過程についてはMahler<sup>14)</sup>が分離・個体化の過程として理論化し、母子一体の状態から徐々にそれが分化し、2才頃には自分が母親とは別の一個の存在であることがわかるようになった。）

Eriksonの第2段階の自律期は、自他の区別が明確化し、「自分」の意志が重要になる時期である。身体の筋肉や神経系の成熟により、排泄をコントロールできる（あるいは歩行により自分の意志で自由に移動できる）ようになると、自分の身体や欲求をコントロールすることに喜びや誇りを感じ、なんでも自分でやりたいという気持ちをもつ。「第一次反抗期」の反抗も、自分が意志をもつこと、自分の行動は自分が決めることを確かに感じるためになされると考えられる。この時期目指される自律感、乳児期の漠然とした「自分」がより明確になった主体感と言える。

このように幼少期から主体感の経験は可能で、自分なりに自分の行動の結果を見て「自分がやったのだ」という思いをもち、行為の主体としての自己の経験を重ねていく。

しかし幼少期の子どもはまだ未熟であり、単純な狭い範囲の対物的主体感は一人で経験できても、外界への働きかけが複雑化したり範囲が広まれば大人による援助や承認が必要になる。例えば排泄のコントロールに関してのはじめの内は、成功しても自分だけでは「できた」という感じは不十分で、母親による承認（「すごいね。よくできたわね」）によって誇らしい主体感になる。一方失敗すれば（早すぎる訓練や厳しすぎる

しつけはそれをもたらす）、自分は自分をコントロールできず、自分の行動の主体にはなれないのではないかという「恥・疑惑」の経験になってしまう。大人の対応によっては、主体感を経験できず、自律性も育たないのである。

子どもが主体感を経験ができるかどうかは、対人的主体感は勿論、対物的主体感にもまわりの大人の対応が関係しているといえる。子どもは大人の承認に支えられて自分の行動が成果をあげたことを確かに感じるのだが、まわりの大人は承認することで直接的に主体感の経験を支援するだけでなく、安定した世界を提供することで、子どもが「こうすればできる」という見通しをもち、「自分はできる」という思いをもてるようにして、成果をあげる基盤を作るという支援もしており、更に「主体は自分である」と感じられるようなしっかりとした自我の発達を促す支援もしているのである。

「こうすればできる」という見通しをもつことができ、「自分はできる」という思いをもてることの重要性を、Antonofskyは首尾一貫感覚（sense of coherence）という概念で示している<sup>15)</sup>。Antonofskyはナチスの強制収容所からの生還者群の内、精神的に健康な者を検討する中で、精神的健康をもたらすキー概念として1) 把握可能感 2) 処理可能感 3) 有意味感 からなる首尾一貫感覚を提唱した。

把握可能感とは、世界は秩序づけられていて、予測可能で理解できるものであるという感覚であり、自分の内外で生じる環境刺激は予測と説明が可能であるという確信である。処理可能感は、問題を処理するための資源が自分のコントロール下に充分にあり、いつでも自由に使えるという確信、有意味感は、問題の処理はエネルギーを投入するに値し、かかわる価値があり、歓迎すべき挑戦と感じていることである。

主体感とは1) 自分の行動が成果をあげたと感じられ、2) その行動の源泉、主体は自分であると感じられる時に経験されるが、その経験の基盤には、把握可能な

世界で自分が意味あることをできそうだという首尾一貫感覚があり、それに基づいて行動し、主体感の経験を重ねる中で、確かな自分、行動の主体としての自分をより明確に感じるようになるのだと言える。

#### 4. 主人公の育ちと主体感

「私の消滅」の主人公小塚はどのように育ち、それがどのような主体感の経験をもたらしたのかに関して、著者の創作ではあるがそこから読み取れることを述べてみる。主人公の育ちに関する情報は、わずか20数ページの主人公による手記1と2に限られ、それも復讐のために自分の心にある闇や恐怖を他者に埋め込むために書かれたものであるが、それでも彼の育ちの問題の核心は表されていると思われる。但しそれは大人になっても主人公をずっと脅かしてきた小3から小5の時のエピソードの語りが主であり、幼少期がどの様だったかはわからない<sup><注1></sup>。母親は彼を連れて再婚したが、「4人家族ならいいのに余計な者がいる」と言われ、父親、その親である祖母、妹から疎まれる日々であった。母親が唯一の味方だったと思われるが、父親から咎められ暴力を振るわれていた母親は、主人公に安定した居場所を提供することは出来ないし、心に余裕がないため彼の要求に適切に応じたりすることはできなかったようである。怖い思いをして、母親の慰めを求めにいくが、父母はけんかの最中でそばに行くことができないという挿話が語られている。彼は欲求に応じてもらえるという安心感や対人的主体感をもてなかった。

主人公はいつも妹から「たたかれた」と告げ口をされ、そのことで母親は父親に責められ、主人公は祖母から体罰を受けていた。実際には妹をたたいたことなどなく、祖母も時にそのことに気づき、体罰を与えるふりをするだけのこともあったとある。彼は自分がたたいたとは思っていなかったが、たたいたことの罪悪感を感じていたと言う。自分の行動と外界からのフィードバックに齟齬があるため（一度もたたいた

ことはないのに、いつもたたいたことで咎められる)、自分が外界に対して何をしたのかが不鮮明になり、自分が自分の行動の主体であるという経験が歪んでしまっていたと思われる。

妹が崖から落ちるのを恐れる一方で、彼は妹が落ちるような状況を作り、妹の肩を掴むが、それを振り払おうとした妹は崖から落ちて怪我をする。落とす意図はなかったのに、結果的に落ちてしまい、彼が落としたとされる。ここでも自分が外界に働きかけたことの結果と、彼の意図が大きく食い違っている（但し、実は彼が意図をもって突き落とした可能性も否定できない<sup><注2></sup>）。

自分が外界に対して何をなしたのかが不鮮明であり、まわりから疎まれ、自分の呼びかけに応じてくれる他者もない状況では、主体感の経験は難しいと言える。そしてそのことの基盤には首尾一貫感覚をまわりの大人から与えてもらえないということがあると思われる。子どもが把握可能感を感じるためには、自分の行動の結果を明確化したり、世界の仕組の理解を助けてくれる他者が必要なのに、彼にはそれが無いし<sup><注3></sup>、更に把握をむずかしくするような経験も多い。子どもにとって両親の性交渉場面は了解不能だが、主人公はそれを目にし、また母親は父親から暴力を受けながら、その苦しみの声がいつの間にか快感の声になったりする場面にも出会っている。その後も母親が多くの男と暴力と性の混合のような営みを繰り返すのを、彼は何

<注1>小塚はゆかりに親密な暖かい思いをもち、和久井とも心がつながっていたし、母親も酒と男に溺れてしまったが、暴力を振るう男から小塚を必死に守ろうともしてくれており、幼少期には母親とよい関係をもっていたと考えられる。

<注2>その時小塚は「黒い線が伸びる」のを見るが、その後も攻撃性が発動し悪が実現化する時にこの表現がなされており、著者はこの場面を小塚の意図的な攻撃であると考えている可能性がある。

<注3>学校や仲間集団というような家庭以外の世界もあるはずだが、混乱していた彼にとっては意味をもたなかったのだろう。

度も見る。そもそも世界は子どもにはわからないことで満ちているが、子どもはわかる世界を自分の世界とし生きていく。しかし彼が生きる世界は混沌としていて、身のまわりの世界も自分の行動に応じてフィードバックを返してくれるという了解可能なものではない。わけのわからない世界では、人は自分の行動の主体にはなりえず、自分が何をしたらいいのかも全くわからない<sup><注4></sup>。

性の目覚めや精通に対する戸惑いも小学生の彼を混乱させるものだった。それは自分のコントロールを超えたことであり、それまでに経験したことのないこと故、誰もが戸惑うと思われるが、彼の場合世界が混沌としていて、自分の行動が世界とどうかかわるのかに關しても混乱しているため（そして話し合う友人もない）、戸惑いが大きかったと言える。

母親を押し倒した時、母親が性的に誘惑した気がして怒りを感じた主人公は、（直接暴力を振ったのではなく、飛び散った食器の破片によってではあるが）母親に怪我をさせてしまう。母親の額から血が流れているのを見た時、「自分の想いがついに到達した気がした」と主人公は書いている。また妹が落ちていく時にも同様に、「喉のつかえがずっと下に降りていく」と感じたことある。自分が世界とどうかかわっているのかわからない主人公は、妹が崖から落ちていく、あるいは母親が額から血を流すという明確で鮮烈な結果を得た時に、やっと自分のかかわりによる主体感を疑似経験できたのではないか（自分の意志だったのかはわか

らないが、何かすごいことができたという感覚があったのだろう）。彼は「打たれる者から打つ者へ変わる安堵感を感じた」と書いているが、やっと主体感を経験できる側に立てたという安堵感なのだと思う。

この手記から伺われる彼の生育過程の問題点は、自分の意図に基づく外界への働きかけに対するフィードバックが歪んでいたこと、対人的応答性が持たず、また首尾一貫感覚をもてなかったため、主体感の経験に問題があったこと、そして鮮烈な結果によって不明瞭な主体感が補われ、必ずしも主体的にやったわけではないが、悪をなしたという強い主体感を経験し、それが快感を伴う不気味な記憶として心に刻まれたということである<sup><注5></sup>。

その後、彼は施設に送られ、それまでの問題を修正する試みがなされ、そして精神科医の養子になる。その頃の記述は全くないが、ごく普通の対人的応答性のある家庭で構造化され安定した環境が提供され、きちんとした教育を受けて、世界は了解可能なものになっていったと考えられる。様々な経験をし、必要時には適度な援助も受け、自分は問題を処理できるという感覚や、意味あることをなすという感覚も身につけ、徐々に首尾一貫感覚をもつようになり、そして精神科医になることでその傾向は更に高まったと思われる。但し生育の過程にみられる問題は彼の自我発達に影響を与えたと思われるし、また小学5年過ぎまで了解可能な世界に生き主体感をもてずに振り回されていた過去の記憶があり、それが心の奥でくすぶっていた。

<注4>フィードバックがランダムに変わることが人に対して与える破壊的影響について、著者は洗脳歴史のところで述べている。

<注5>彼が幼女連続殺人犯の宮崎勤に興味をもち、手記3と4でその分析をしているのは、自分の心にある歪みが悪に導いたということ、性において問題を抱えていたということなどで共通性を感じていたからだと思われる。しかし、宮崎がネズミ人間にやられたと感じているのに対し、彼の場合は全て自分の意志であるという意味では正反対であると言える。

## 5. 主人公のとした行動と主体感

小塚の心には幼少期の歪んだ育ちに由来する問題があったが、成人後は精神科医として問題を露呈することなく生きていたと思われる。ゆかりと出会い、それまでにはなかった幸せな時を手にするが、彼自身が施した治療のためのECTが彼女の記憶を消してしまい、彼女は彼の元を去ることになってしまう。ゆかりは和久井を愛する様になり、小塚は失恋という強いストレ

スに見舞われるが、しかし絶望的になったり、ゆかりの恋人になった和久井を恨んだりすることもなく、二人を穏かに見守る。強いストレスにもかかわらず、健康的な対処ができており、首尾一貫感覚が強いことが予想される。

しかしゆかりが木田と間宮によって理不尽に自殺に追い込まれると、小塚は強い怒りに見舞われる。許すことなどできない、復讐したいと思うが、生きようとするエネルギーが稀薄化し死を望むようになって、吉見のところに治療を受けに行く。吉見は自分がやってきたこと—小塚に偽りの記憶を植えつけたこと、患者に偽りの情報を与えて破滅させたこと—を話し、小塚に悪を取り込んで「不幸の下敷きになるのではなく、不幸を作り出す根源になること」を勧める。その後小塚は、自分が死ぬことにも彼らを殺す事にも興味を失うが、「私」を彼らに埋め込むことを思いつくと、和久井の協力を得て、精力的に動き出す。

精神科医である彼は、愛する人を死に追いやった2人への復讐に、ECTによって記憶を曖昧にし、催眠によって人の意識に働きかけるという専門的なスキルを行使する。それはゆかりの治療に使っていた方法であり、彼自身の治療にも使われていたのだが、それをより強く、治療ではなく彼らを苦しめるためにやるのである。彼らの記憶を脳内から消し、自分のつらかった人生を埋め込み、その後和久井の望みを満たすために彼らを死へ誘う。

小塚は悪意をもつ他者の気まぐれによって蹂躪され、つらい思いをさせられてきた。自分が自分の行為や感情の主体であるということを歪められ、他者に振り回され、他者の思惑に従わせられる人生だった。なんとか主体感を取り戻したと思っていたのだが、再び他者に蹂躪されたと感じた小塚は、吉見のいう様に自分が他者を蹂躪する側になろうとし、過剰な主体感—神がもつような主体感を求め、他者を自分の意のままにすることを望む（中村文則の作品にはそのような人物がしばしば登場する）。この小説では、ECTを用いて「彼

らがこれまで生きてきた人生をすべて破壊し、私の人生そのものをその闇と共に彼らの中に埋め込み」「自分が体験した悪夢を体験させて、それによって内面をつぶす」ことが目指される。それは他者を全的に支配することである。小塚は彼らが変わっていく過程を、彼を痛めつけ損ってきた吉見のように高揚した気分で冷静に見ている。それは歪んだ形での「行為の主体としての自己」の経験のように思われる。

彼は二人を苦しめる復讐としてその方法を選んだが、「苦しめる」という意味では必ずしも最適の方法ではないと思われる。なぜなら、彼らの過去も小塚のものと同様（もしかしたらそれ以上に）悪夢のようだったかもしれないからである。死ぬ直前に、自分の人生をなくし、他の人生を与えられることが、彼らの場合苦しみを大きくするとは思えない（麻酔なしでECTを施されたり、罰として電撃を与えられることでの苦痛は大きかったようだが）。しかし他者を全的に支配するという観点からは成功しているといえる。

小塚が絶望から死ぬのではなく、今までの自分を消滅させて生きることを選んだのは、「自分が死ぬことはこの世界に敗北したことであり、そうなるわけにはいかない」という思いからであった。小塚は他者の悪意によって翻弄されるが、その背後には神がいて、神によって翻弄されたという思いがある。自分の人生を思うままに操る神から、人生を取り返し、そして「こういう人生を歩みたかったというささやかな自分の願望」を叶えようとする。同じ様なことを、彼はゆかりに語りかけてもいる。「きみは生まれてきたんだからこの世界を楽しんでいいはずだ。たとえこの世界が残酷でも、僕たちはやっていけるのだ。人生で不幸に見舞われたとしても、そんなものは消すことができる。（略）神が望んでも、人間がそれに付き合う必要はないのだ」

つまり主人公が望んだのは、「私の消滅」により得られる主体感の経験であったと考えられる。主人公は復讐のために他者を完全に支配することを望み、そし



てたとえ「私」が消滅しようとも、自分の人生を自分が選ぶこと、神ではなく自分が自分の人生を全的に決めることを望んだ。自分の人生を自分が選ぶことはアイデンティティの達成の一要素であるが、アイデンティティの場合は、過去—現在—未来の自分を考え、一貫性・連続性を持ち自分らしさを保った自分を選択するのだが、小塚は過去・現在の自分 (Narrative self) は全て棄て、自分らしくどう生きるかという未来の自分とも無関係に、ただ静かに生きるということだけで、無造作に自分を選ぶのである。彼は「自分」が消滅しても（過去からの自分がなくなり、自分が誰だかわからなくなっても）、一時の主体感を感じたかったのであり、彼がなしたのは究極の主体感の経験であった。彼は我々が通常自己そのものと考えているアイデンティティや Narrative self ではなく、一時的な Minimal self や主体感の充実を選んだという点で、この小説は読者に衝撃を与える。

しかしその決断はよかったのだろうか。どうしても受け入れられない位つらいこと、ひどいことに会った時、人は 1) 回避する・逃げる 2) 無意識層に抑圧する、あるいは自分から切り離す（解離）、情緒を除くというような対処をせざるをえないが、3) 語り直しや再解釈によって受け入れられるような形にして、何とか自分の経験として受け入れる（他者の助けを得る等して）ことが可能な場合もある。復讐をして、自分はアイデンティティを棄て他の人生に逃げるという手段をとる前に、精神科医の主人公は 3) の方法を試みる事が可能だったと思われる。また彼は直接殺してはいないが、彼の意図通りに復讐は遂行され、3人に死をもたらしている。彼はその後、その記憶をなくすため意識的には罪悪感をもつことはないが、無意識の中に残る可能性はあるし、やがて記憶が戻ることもありうる。彼はゆかりを救いたかったし、母親も救いたかった（ゆかりを救いたかったのは、実は母親を救いたかったからだと思う箇所がある）。それはもうできないことだが、精神科医として、同じように苦しむ

人を救うことができる立場にあり（そのことで自らの苦しみが癒える可能性もある）、肯定的な形で社会に位置づいて、地道な主体感をもつ人生を送ることができたように思われる。

主体感に問題がある事例として中村文則の「私の消滅」の主人公を取り上げて、なぜ彼の生が不安定なものになったのかを主体感の観点から検討し、何が主体感の経験をむずかしくしたのか、それを補うために彼は何をしたのかの分析を行った。彼の行った衝撃的な「私の消滅」は、彼の育ちがもたらした主体感の歪みに基づいていて、確かな主体感を希求するための方法であったこと、彼にとって自分の連続的なアイデンティティよりもその時々主体感の方が重要であることが指摘された。

## 引用文献

- 1) 中村文則：私の消滅、文芸春秋、2016.
- 2) 中村文則：去年の冬、きみと別れ、幻冬社、2013.
- 3) 中村文則：悪意の手記、新潮社、2005.
- 4) 中村文則：何もかも憂鬱な夜に、集英社、2009.
- 5) 山岸明子：行動の主体としての自我の形成—乳幼児期における対人的、対物的相互作用の役割—、教育学研究、53-4、347-354、1986.
- 6) Erikson, E.H. : Childhood and society (2nd ed.), 1963, 仁科弥生訳、幼児期と社会、みすず書房、東京、1973.
- 7) White, R.W. : Motivation reconsidered: The concept of competence. Psychological Review, 66, 297-333. 1959.
- 8) Rotter, J.B. : Generalized experiences for internal versus external control of reinforcement. Psychological Monographs, 80, 1-28. 1966.
- 9) deCharms, R. : Enhancing motivation : Change in the Classroom. 1976、佐伯胖訳、やる気を育てる教室：内発的動機づけ理論の実践、金子書房、東京、

1980.

- 10) Bandura,A. : Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-147, 1982.
- 11) 板倉昭二 : 自己の起源—比較認知科学からのアプローチ、金子書房、東京、1999.
- 12) Neisser, U. : Criterion for an ecological self, In Rochat,P. (Ed.) *The self in infancy : Theory and research*, 1995. (11) による)
- 13) Gallagher,S : Philosophical conceptions of the self : Implications for cognitive science. *Trends in Cognitive Sciences*, 4, 14-21, 2000.
- 14) Mahler,M. S., Pine, F. & Bergman, A. : *The psychological birth of the human infant*. 1975. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳、乳幼児の心理的誕生 : 母子共生と個体化、黎明書房、名古屋、1981.
- 15) Antonovsky, A. : *Unraveling the mystery of health : How people manage stress and stay well*. 1987 山崎喜比古・吉井清子監訳、健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム、有信堂、東京、2001.